

否定的結果を表す結果構文：意図性の有無

江口, 巧
九州大学大学院言語文化研究院

<https://doi.org/10.15017/7151752>

出版情報：言語科学. 47, pp.35-45, 2012-03-22. 九州大学大学院言語文化研究院言語研究会
バージョン：
権利関係：

否定的結果を表す結果構文

—意図性の有無—

江口 巧

1. 序

英語の結果構文はその分類基準によってさまざまなタイプに分類されるが、結果述語の表す意味を語用論的観点からみた場合、次のように、大まかに二つのタイプに分けることができる。

- (1) a. He wiped the table *clean*.
- b. She shook her son *awake*.
- (2) a. He ran his Nikes *threadbare*.
- b. She danced herself *to exhaustion*.

(1)の結果構文の結果述語は、比較的望まれた結果を表しているのに対し、(2)のそれは、該当する事物（人物）が本来のありようを逸脱した望ましくない結果を表している。事実、(2)のようなタイプの結果構文に対し、鈴木(2007)は「機能不全」の事象を表すとし、また、都築(2007)は、「通常のデフォルト状態からの離脱」を表すとしている。結果述語が表すこのような二つのタイプの結果を、今仮にそれぞれ肯定的結果・否定的結果と呼ぶとすれば、これらの結果状態を結果構文を用いて叙述する意味あいには十分にあると思われる。肯定的結果の場合、概して、動作主がある行為を行うことで、意図された状態が達成されたことを表すものであり、他方、否定的結果の場合は、動作主の行為により、偶発的に望ましくない状態がもたらされたことを表している。後者のタイプが前者のタイプと同等の情報価値をもつことは、以下の描写述語を含む構文において、いわゆる *norm* の状態を逸脱した行為が、むしろ日常慣習的に行われる行為よりも、言語を用いて伝達するに値するより多くの情報価値を有するのと同様である。

- (3) He ate the shrimp *uncooked*.
- (4) He drove the car *drunk*.

では、肯定的・否定的結果をもつ二つのタイプの結果構文が存在することは、結果構文全体の枠組みの中では偶然の産物なのであろうか。この二つのタイプを、もっと体系的な枠組みの中で位置づけることは可能であろうか。

ここで取り上げている二つの結果述語の違いには、これまでたびたび指摘されてきた通り、動作主の意図の有無が関わってくる。本稿では、先行研究のうち、意図性に絡む目的役割という観点から結果構文を体系的に分類した影山(2005, 2007)、また影山の枠組みを踏襲し、意図性の有無により結果構文を分類した都築(2007)、および「機能不全」を表す結果構文について触れた鈴木(2007)、この三者の見解を絡めることによって、二つのタイプの結果構文、特に否定的結果を表す結果構文を明確に位置づけることを試みる。2節では、影山(2005, 2007)、都築(2007)、鈴木(2007)それぞれの見解を概観する。なお、その際、影山(2005, 2007)については、この論考が過去の結果構文研究に寄与した点についても言及する。また、鈴木(2007)が触れた見解に関連して、本稿で

の結果構文に関する問題の解明には、control resultative / ECM resultative という統語的観点からの区分も有効であることを述べる。本稿の主要な論点である 3 節では、影山、都築、鈴木の見解を踏まえ、それぞれの不備を相互に補いつつ、統語的・意味的両側面から否定的結果をもつ結果構文の特性を論じていく。さらに、4 節では、動作主の意図性の有無が、結果構文に関わる多くの言語現象の説明に有効であることを論じる。5 節は結論である。

2. 先行研究

本節では、先行研究として影山(2005, 2007)、都築(2007)、鈴木(2007)の見解を概観する。

2.1. 影山 (2005, 2007)

結果構文は、動作主がある行為を行う上位事象と、それによりもたらされる結果状態を表す下位事象とが CAUSE (使役関係) を介して合成したものである(影山(1996))とされるが、過去の結果構文研究において諸学者の関心を集めたテーマのひとつが、この二つの事象の組み合わせに関するものである。結果構文が成立するひとつの条件として、二つの事象の間に一体性が保証される必要があるということがしばしば論じられるが、このことの説明として、影山(1996)は概念構造を用いた定式化を試みた。例えば、以下の二つの結果構文を見てみると、一般的に、他動詞の用いられた(5)のタイプは容認性が高いのに対し、非能格動詞の用いられた(6)のタイプは容認性が下がるとされる。

(5) He shot the bear dead. (影山(1996: 259))

(6) ?The rooster crowed the children awake. (ibid.)

このことを説明するのに、影山は(5), (6)にそれぞれ(7), (8)のような概念構造を想定した。

(7) [x ACT ON y] CAUSE [y BECOME [y BE AT-DEAD]]

(8) [x ACT (?ON y)] CAUSE [y BECOME [y BE AT-AWAKE]]

(7)では、CAUSE を介した二つの事象とともに y という共通項、すなわち共通の参加者が存在するのに対し、(8)では、上位事象に働きかけの対象である y の存在を想定しにくく、よって二つの事象の一体性が保証されないことになる。このように、影山は二つのタイプの容認性の違いを概念構造を用いて明晰な形で示した。しかし、ここで問題となるのは、次のような二つの例である。

(9) She shook him awake.

(10) She watered the tulips flat.

これらの例で用いられているのはともに他動詞であり、その概念構造は両者とも(7)のようなものが想定される。とすれば、先ほどの「事象の一体性」という観点からいくと両者の容認性は同等であると予測される。しかし実際には、(9)のタイプに比べて(10)の容認性は下がるとされる。直感的には、この容認性の違いには認知語用論的要因が関わっていると思われるが、このことにより、これまでこの種の問題解決の定式化は困難であるとされてきた。しかし、影山(2005, 2007)は、結果構文の二つの事象の組み合わせに関し、動詞の語彙概念構造、およびクオリア構造の目的役割の概念を用いて、様々なタイプの結果構文の容認性・生産性を体系的に説明した。影山(2005)が提示した結果構文の下位分類は(11)に示す通りである。

(11) 結果構文の下位分類(影山 (2005: 96))

本来的結果構文 (= LCS に結果状態が含まれる)	(A) break to pieces タイプ: 主動詞の LCS に変化結果が記載され、しかも、その主動詞の事象タイプが transition である。
	(B) wash clean タイプ: 主動詞の LCS に変化結果が記載されているが、事象タイプは process である。
派生的結果構文 (= LCS には結果状態が含まれない)	(C) wipe clean タイプ: 主動詞そのものの LCS は ACT (ON) であるが、目的役割に対象物の特定の変化結果を含む。結果述語は、その目的役割に示された変化結果に対応。
	(D) shake awake タイプ: 主動詞は辞書表記として目的役割を含むが、その中身は 1 つに特定されていないので、慣習化の範囲内で様々な結果述語が可能。
	(E) bark awake タイプ: 主動詞は本来は目的役割を持っていないが、意図的な状況において何らかの目的役割がオンラインで作り上げられる。
	(F) swim the swimsuit to tatters タイプ: 主動詞の行為によって偶発的に生じる結果を表す。表現の範囲が限られ、許容度も低い。
	(G) cry one's eyes out タイプ: 特定の動詞・目的語・結果述語の組み合わせに限られたイディオム。誇張表現と解釈されることが多い。

影山の論点を大まかに述べると、動詞が状態変化を表すとされる本来的結果構文((A) break to pieces タイプ, (B) wash clean タイプ)では、主動詞の語彙概念構造(Lexical Conceptual Structure: LCS)に変化結果が記載されているというものである。そして、この種の結果述語はどの話者にとっても問題なく受け入れられるとする。さらに、影山は Pustejovsky(1995)の提示したものと異なる独自のクオリア構造を提唱し、動詞の表す行為の果たす目的がクオリア構造の目的役割に記載されているとした。そして、状態変化が動詞の LCS に含まれない派生的結果構文については、結果述語が示す状態が動詞の目的役割に記載されているものほど容認性が高いとした。例えば、Cタイプに属する wipe という動詞は、「汚れを取り除く/ その場所をきれいにする」という特定の役割をもつため、wipe clean という言語化が容易に可能となる。Dタイプに属する shake という動詞は、力を加えることによって対象物に何らかの変化を引き起こすことを目的としているが、意図される変化は多様であり、ひとつに特定できない。言い換えると目的役割の中身は未指定(underspecified)である。そのため、例えば shake awake は、可能な組み合わせのうちのひとつを表すことになる。また、Eタイプの動詞 bark になると、本来目的役割をもっていないが、その場限りの動作目的がオンラインで目的役割に組み込まれる。その結果、bark awake が容認されることになる。そして、特定の目的が意図されない動詞が用いられた Fタイプに至って、結果構文の容認度は以下に示す通り、かなり低下するという(各文の容認性の判断は、影山がネイティブチェックを依頼したカナダ人インフォーマントの判断である)。

(12) *?She swam her swimsuit to tatters.

(13) *The joggers ran the pavement thin.

(14) *The chef cooked the kitchen walls black.

以上のように、影山は結果構文を、LCSもしくは目的役割に、結果述語が表す動作の目的が記載されているかどうかで下位区分し、AタイプからGタイプに下がるほど、結果構文は受け入れられにくいとした。この結果、先に挙げた(9)と(10)の容認性の違いについては、行為者の意図の絡む(9)の *shake awake* はDタイプで容認されるのに対し、行為者の意図しない結果を表す(10)の *water the tulips flat* はFタイプに分類され容認されにくいといった具合に、意図性の有無を基準とした明快な説明が可能となる。このように、影山は従来、認知語用論的要因が関わって定式化が困難とされた結果構文の容認性・生産性を目的役割を用いて体系的に説明し、この意味で、影山が結果構文研究に果たした貢献度は大きいといえる。ここで最後に、影山(2005, 2007)の論点を本稿での議論に絡めて確認しておく、動作主がある行為を行う際、特定の目的を達成しようとする意図性が存在するかどうか、結果構文の容認性に大きく関わってくるというものである。

2.2. 都築(2007)

都築(2007)も、上述した影山(2005)の議論を受け、結果構文の容認性に関わる意図性・目的といった概念の重要性を示唆している。都築は、影山の提示した結果構文の下位分類のうち、派生的結果構文のC-Eタイプにおいては、動作主の意図・目的が関わるとしてプラス型とし、そうではないマイナス型のF, Gタイプと区別している。そして、プラス型では、使役行為は結果述語の表す結果状態の達成を目的として、対象物に意図的に直接的な働きかけを行う行為であるとし、派生的結果構文のプロトタイプをなすと述べている。一方、マイナス型に関しては、「意図性という特性が落ち、単なる因果関係を表す使役行為を表すものへと拡張していったと思われる。その分、以下の例に示されるように、病気になるとか、靴が擦り切れるなど通常のデフォルト状態からの離脱というような...行為に限定されている」(p. 157)と述べている。

(15) John drank himself sick.

(16) John ran his Nikes threadbare.

都築のこのような見解も、本稿の主旨に合致するものである。

2.3. 鈴木(2007)

鈴木(2007)は結果構文の aspekto を論じた論考であるが、その中で、「形容詞結果述語に関しては...非選択性結果構文では...機能不全解釈のもとで、主に否定的含意をもつものに限定されている」(P. 132)と述べている。ここで「否定的含意」という言葉は、そのまま1節で述べた「否定的結果」に置き換えられるが、機能不全の解釈をもつ鈴木の挙げた形容詞結果述語の例は以下のようなものである。

(17) She sang herself *hoarse*.

(18) He danced himself *tired*.

(19) We laughed ourselves { *sick* / *silly* / *senseless* }.

既に述べたように、これらの結果述語は「身体機能の正常な状態からの否定的な方向への逸脱」

(p. 120)を表している。なお、鈴木は、この種の結果構文は「行為者の意図をはずれた逸脱的状况を描写するものが多い」(p. 121)と述べ、やはりここに意図性の有無が関わってくることを示唆する言及をしている。

さて、ここで鈴木という言葉に引用された「非選択性結果構文」の定義を明確にしておく必要がある。これは、結果構文に使われている主動詞を統語的観点から分類したもので、以下のような「選択性結果構文」と対立するものである。

(20) He hammered the metal flat.

(21) He kicked the door { open / shut }.

(22) He shot the man dead.

(20)-(22)の例において、動詞はいずれも他動詞で、結果述語の叙述する名詞句(上の例では、それぞれ the metal, the door, the man) は動詞の項となっており、これらの動詞は Simpson(1983)のいう control verb に平行している。一方、上の(17)・(19)に現れた動詞は自動詞で、結果述語の叙述する名詞句(それぞれ herself, himself, ourselves)は動詞の項ではなく、動詞は ECM (Exceptional Case-Marking) verb に平行する。そこで、本稿では、前者の動詞に基づくタイプの結果構文を control resultative、後者の動詞に基づくタイプを ECM resultative と呼ぶことにする。本稿で問題としている否定的結果を表す結果構文を全体の枠組みの中で明確に位置づけるためには、この統語的基準に基づいた結果構文の区分も必要になってくるのだが、詳細の議論は次節に譲ることにする。

3. 否定的結果を表す結果構文の位置づけ

前節では、先行研究として三名の学者の論考を取り上げ、それぞれの見解を概観した。影山(2005, 2007)および都築(2007)は、結果構文を動作主の意図性の有無によって分類したものであった。一方、鈴木(2007)は、「機能不全」の解釈が ECM resultative において見られると論じたものであった。本節ではこれらの先行研究の知見を援用しながら、否定的結果を表す結果構文の、結果構文全体の枠組みにおける位置づけを明確にすることを目指す。

2.1. 節でも論じたように、動作主の意図性の有無という観点から結果構文を分類した影山(2005, 2007)の分析は、認知語用論的要因が絡んで明晰な定式化を阻んできた上位・下位事象の組み合わせに関する問題にある程度の決着をつけたといえる。また、(11)に示した結果構文の下位分類を再度概観してみても、本稿で問題としている肯定的結果を表す結果構文がほぼ A-E タイプに並び、一方否定的結果を表す結果構文が F, G タイプに並ぶといった具合に、意図性・目的の有無を基準とする整然とした階層関係が成立していることから、影山の分類は、結果構文の全体像をある程度うまく捉えているといえることができる。また、都築(2007)の見解についても同様のことが言える。しかし、肯定的/否定的結果構文の全体像をより明確に示すことを目指した場合、彼らの見解に欠けているのは、鈴木(2007)が用いた、主動詞が control verb か否かによって結果構文を区分した統語的視点である。そして都合のよいことに、この統語的視点を取り入れることにより、都築(2007)の指摘したプラス型の結果構文における「対象への直接的な働きかけ」という側面がうまく説明できるのである。

影山の分類による本来的結果構文の場合、例えば A タイプに属する *break* は以下に示すように、自動詞・他動詞ともに存在するが、どちらの場合も変化結果は LCS に記載されており、その容認性に揺るぎはないので、以下では派生的結果構文に絞って議論を進めていく。

(23) *The vase broke to pieces.*

(24) *Tom broke the vase to pieces.*

影山の結果構文の下位分類で、C タイプ (例: *wipe clean*) および D タイプ (例: *shake awake*) は、影山自身は述べていないが、動詞は多くが control 型である。影山は、C, D タイプでは、結果述語で表される変化結果は動詞の目的役割に記載されていると述べているが、このことは、動詞が control 型であることと深い関わりがある。つまり、control 型の動詞は統語的には後続する目的語を選択するが、この場合、表される事象は、概して、動作主が行為の対象となるものに対して直接的に働きかけを行うことになる。そしてこの際、都築(2007)が西村(1998)の「直接操作」の定義を引用して述べているように、「行為者(人間)は行為対象に(位置、状態などにおける)何らかの変化を生じさせることを目標としている」、つまり、行為者は対象に変化結果をもたらすという意図をもって行為を行うのである。このように、control 型の動詞は、行為者の意図、そしてそれに伴う行為目的の概念と結びつきやすい。よって、C, D タイプにおいては、結果述語の表す変化結果は動詞の目的役割に記載されている可能性が高く、それゆえ、結果構文としての容認性も上がるということになる。

一方、F タイプになると、影山によれば、結果述語が表す変化結果は動詞の目的役割に記載されておらず、偶発的に生じる結果を表すといひ、G タイプになると、特定の動詞・目的語・結果述語の組み合わせに限られたイディオムであるということで、両タイプとも動作主の意図は介在しないといつてよい。そして、統語的に見ると、F, G タイプに現れる動詞は、ほとんどが ECM タイプである。¹ つまり、これらのタイプでは、動詞は後続する名詞句を選択していないため、この統語的側面が意味にも反映され、動詞の表す行為は名詞句で表される対象に直接的に働きかけるものではない。そのため、動作主が対象に変化結果をもたらそうという意図や目的は介在しにくい。その結果、このタイプの結果構文では、当初の意図になかった偶発的な結果を表すことになる。そしてこのような場合、該当する事物(人物)がデフォルトの状態を逸脱した機能不全などの否定的な結果を表すケースが多くなることは、1 節で述べた通り、結果構文による情報伝達上の価値という観点からみても必然的な結果といえよう。以上のように、F, G タイプにおいても、C, D タイプと同様、結果構文の統語タイプと表される事象との間で整合性のある説明が可能となる。

では、D タイプと F タイプの中間に位置する E タイプではどうであろうか。影山によれば、このタイプでは、主動詞は本来は目的役割をもっていないが、意図的な状況において何らかの目的役割がオンラインで作り上げられるということであった。つまり、通常は、動詞が表す行為は目的を想定しにくい、状況次第でそれが可能になるということである。興味深いことに、2007 年

¹ 影山(2007)では、F タイプの例として *water the tulips flat* という control タイプの動詞が用いられた例が挙げられているが、これは極めてまれなケースである。

の論考で影山が E タイプとして挙げた例を見ると、以下の通り、control タイプと ECM タイプが一例ずつ挙げられている。

(25) The prince kissed the princess awake. (control resultative)

(26) The dog barked the neighbors awake. (ECM resultative)

(25)に現れた kiss という動詞が表す行為は、本来愛情表現のためのものであるから、王女を目覚めさせることはその場限りで想定された目的ということになろう。また、犬は、通常誰かを目覚めさせる意図をもって吠えるのではないが、例えば賢い犬が火事を知らせるために近隣の人を起こす意図で吠えたと想定すれば、この特定の状況で目的役割を想定することは可能であろう。以下に、他の結果構文に関する文献に引用された例で、影山の分類で E タイプに属すると思われるものを挙げておく。実際のところ、E タイプと D タイプとでは、分類基準が若干重なる部分があり、どちらに類別すべきかの判断が難しい。

(27) You may sleep it [= the unborn baby] quiet again.

(Levin and Rappaport Hovav (1995: 36))

(28) She kissed the anxiety away from him. (中村 (2004: 31))

(29) She frightened an admission out of him. (ibid.)

(27)は、「あなたが眠ることで、あなたのお腹の中にいる赤ん坊が再びおとなしくなるかもしれませんよ」という意味を表している。動詞 sleep が表す眠るという行為は、本来はこのような目的でなされるのではない。(28)、(29)の表す意味は、それぞれ「彼女は彼にキスをして、彼の不安を取り除いてやった」、「彼女は彼を脅して、彼に事実を告白させた」というものである。統語的には、これらの例で使われている動詞は、それに後続する名詞句を選択していないためいずれも ECM 型であるが、(28)、(29)においては、上の解釈からもわかるように、本来他動詞であったものが、直接の働きかけの対象ではない名詞句をとったことで、結果として ECM 型になっているところが興味深い。いずれにせよ、意味的に意図が介在するものの、想定される目的役割がその場限りのものである E タイプが、統語的に control 型あるいは ECM 型の一方に落ち着かず揺れがあるという事実も、ここで論じている、結果構文の統語タイプと意図性の有無との整合性を裏付けるひとつの根拠となりうるかもしれない。

以上、本節では、影山(2005, 2007)、都築(2007)、鈴木(2007)の見解を援用し、それぞれの不備を補う形で、否定的結果構文の位置づけを明確に示した。肯定的結果構文と否定的結果構文は、先行研究が示唆する通り、意図性の有無という基準に基づいて区分されるが、そこには、結果構文が control resultative であるか、ECM resultative であるかという統語的要因も関わってくる。つまり、否定的結果構文は、派生的結果構文の中でも主に ECM resultative であって、意味的にみると、動詞の表す行為が対象に直接的に働きかけるものではないため、行為者が対象に変化結果をもたらそうとする意図が介在しにくく、それゆえ、行為者の予測しなかった偶発的に生じる否定的な結果を表すことになりやすいのである。

4. 行為者の意図性一言語分析上の意義

これまでの議論で、肯定的結果構文と否定的結果構文を定義づける上で、行為者の意図性とい

う概念のもつ重要性は十分明らかになったと思われる。そこで、本稿での議論の最後に、この行為者の意図性という概念が、結果構文に関連した他の言語事象を説明する上でも重要性を担っていることを示しておきたい。

まず、英語には(30)のような結果構文と類似した(31)のような構文がある。

(30) a. Mary wiped the floor clean.

b. The kid licked the plate clean.

(31) a. Mary *wiped clean* the floor.

(Taniwaki (2006: 267))

b. The kid *licked clean* the plate.

(*ibid.*)

(31)では、動詞の直後に結果述語が隣接して現れている。これを Taniwaki(2006)にならって RVA (Resultative Verb-Adjective Combination)と呼んでおく。(31)の容認性とは対照的に、以下の(32)の結果構文に対応する(33)のような RVA は容認されない。

(32) a. She shook her husband awake.

b. John hammered the metal flat.

(33) a. *She *shook awake* her husband.

(Taniwaki (2006: 267))

b. *John *hammered flat* the metal.

(*ibid.* 268)

(31)と(33)の RVA における容認性の違いを説明するのに、Taniwaki(2006)は、影山(2005)の結果構文の下位分類に基づいた分析を行っている。それによると、容認される(31)の動詞と結果述語の組み合わせは影山の下位分類ではタイプ C にあたり、ここでは、形容詞は動詞の目的役割に記載された目的、より正確にいうと、動詞の表す行為の唯一的に指定された目的を表している。一方、容認されない(33)のような RVA はタイプ D にあたり、ここでは、動詞が表す行為の目的が唯一的に指定されているわけではなく、よって RVA として容認されないと Taniwaki は論じている。タイプ C と D では、両者ともに行為者の意図・目的が絡むとはいえ、動詞と形容詞が隣接する RVA では、二つの要素間により強固な緊密性が要求され、そのためには、形容詞は、動詞が指定する唯一の目的を表すものでなければならないという強い制約がかかるのだと思われる。Taniwaki のこの論考では、他のタイプの RVA に関する議論においても、その容認性に行為者の強い意図が関わっていると示唆がある。いずれにせよ、RVA の容認性を左右する要因として行為者の意図性の有無が大きな鍵を握っていることは否定できない。²

次に、木原(2011)は、以下のような、典型的な例からかけ離れた結果構文を成立させるメカニズムとして、修辭的動機が重要であると述べている。

(34) Sleep your wrinkles away.

(Levin and Rappaport Hovav (1995: 36, ad))

(35) Drive your engine clean.

(*ibid.* 37, Mobil ad)

(34)は「(この化粧品を肌に塗って) 眠ることでしわをなくしてください」ということを意味する

² Taniwaki は、影山の結果構文の下位分類で、以下のようなタイプ A, B に基づく RVA の容認性についても議論しているが、この容認性を左右するのは行為者の意図に直接かかわる要因ではないため、本稿での議論では省いている。

i) Mother *bleached white* the shirt.

ii) *Father *painted white* the fence.

化粧品メーカーの広告文と思われる。同様に、(35)は、(特定の石油会社の)ガソリンを入れて運転することで、車のエンジンがきれいになるということをやたい文句にした石油会社の広告文であると思われる。木原は、これらの例では、動詞に後続する名詞句が動詞本来の目的語ではない(すなわち、上の議論でみた ECM 型の結果構文である)として、典型例(つまり control 型)からのずれを認識した話し手が、このずれを連想・推論によって比喩的に解釈する際に関わる要因を修辞とみなし、ずれの大きさと修辞的効果の相関性を論じている。木原のいうように、確かに(34)、(35)では修辞性を感じとることができる。しかし、筆者の見解では、ここに修辞性が絡む原因は、単に、動詞直後の名詞句が動詞本来の目的語ではないということだけにとどまらずに、ここにはさらに行為者の意図の欠落も関わっていると考える。つまり、上の二つの例は統語的には ECM 型の結果構文であり、動詞が表す行為が対象に直接的に働きかけることは通常考えにくいから、結果述語は行為者により意図された結果を表すというより、偶発的に生じる結果とみなされる。そして、このような結果構文の場合、命令文の形式をとることはまれである。命令文は、典型的には、以下のように、行為が意図された結果を伴っている場合、すなわち影山の分類でいくと A-D タイプの場合である。

(36) Wipe the table clean.

(37) Shake him awake.

ところが、(34)、(35)に見た例では、本来、行為者の意志ではコントロールできないはずの結果状態を、あたかも自分の意図で操作してそれを達成可能であるかのような命令文の形式をとっている。そこにこれらの結果構文の特異性があり、それが修辞性を生み出すひとつの原因になっていると思われる。そして、商品の広告文として用いられているこれらの例は、そのような修辞性を巧みに利用したものであると言えよう。このように、(34)、(35)に固有の修辞性は、意図性を表現形式と絡めることで説明が可能となるのである。

本節の最後に、以下の二つの結果述語の容認性の違いについて考えてみたい。

(38) She washed her clothes clean/*dirty.

wash という動詞は、上の影山の結果構文の下位分類で見たように、動詞の語彙概念構造の中に clean という変化結果が記載されているため、それと矛盾する結果述語の dirty はとらない。このような現象自体は、過去の先行研究の中でもたびたび指摘されている。しかし、木原(2002: 28)は、これの反例となる次のような興味深い例を挙げている。

(39) The situation was not getting any better. Everyday the water got muddier and muddier. People gave up using water to clean all sorts of ordinary items. Yet Alice just could not stop washing the clothes with the water. For her it did not matter whether the water was actually cleaning the clothes. Betty would come over to the village to make fun of Alice. "Oh, you are washing your clothes dirty."

上の引用の最後に出てくる you are washing your clothes dirty という文では、wash という動詞が含意しない dirty が用いられているにもかかわらず、この文脈においては全く問題ない。木原はこの結果構文の容認性について明確な説明を施していないが、ここでは、それを説明する目的で、相対立する結果述語が容認される(38)と(39)について考えてみたい。これらの二つの形容詞

clean と dirty は、同じ cleanliness に関するスケール上のそれぞれ上位と下位の領域を表すと考えられるが、単に違いがそれだけであるならば、(38)に示されるように、結果述語としての二つの形容詞の適格性は相対立する。しかし、(38)と(39)は、単に形容詞のスケール上の指示領域の違いのみならず、行為者の意図の有無という点においても根本的に異なっているのである。(38)では、clean は衣類を洗濯する行為者の目指す結果状態とみなされ、その目的が達成されたことが述べられている。一方、(39)では、結果述語 dirty は、文脈から判断して、Alice が達成を目指した結果状態ではなく、偶発的結果であって、そこに Alice の意図は全く介在していない。さらには、このように Betty が現状を描写する状況で、進行相の аспек트가用いられていることも注目値する。英語では、現在の状況説明というシチュエーション、特に好ましくない状況を指摘する場面において、以下のように、しばしば進行形が用いられる。

(40) Hey. You're going in the wrong direction.

このような状況では、いわゆる norm の状態から逸脱していることを指摘する描写となっているため、(39)のように進行相の結果構文に現れた動詞と結果述語の組み合わせは、標準的な規範を逸脱していても許容されると考えられる。³ このように、例外的に許される結果構文を説明する際にも、意図性と形式を絡めた説明が有効となるのである。

以上本節では、行為者の意図性という概念が、結果構文に関わる諸々の言語現象を説明する際に有効となることを論じた。

5. 結語

本稿では、事物(人物)が本来のありようを逸脱した否定的結果を表す結果構文を、結果構文全体の枠組みにおいて明確に位置づけることを主要な論点とした。先行研究のうち、変化結果が主動詞の語彙概念構造および目的役割に記載されているか否かという観点から結果構文を下位分類した影山(2005, 2007)、および彼の分析を踏襲して結果構文を行為者の意図性の有無により分類した都築(2007)において、否定的な結果構文は、意図性の介在しない下位もしくはマイナスのタイプに属するというある程度の位置づけはなされていたものの、これに、鈴木(2007)のとった control resultative / ECM resultative という統語的な観点からの分析を取り入れることで、問題の結果構文のより明確な位置づけが可能になることを示した。すなわち、行為者の意図が介在しないとされる下位のタイプの結果構文では、主に統語的に直後の名詞句を選択しない ECM 型の動詞が現れ、それにより、対象に対して動作主の直接的な働きかけのない行為が表されることになり、その結果、意図性の欠落した偶発的な結果状態が表される傾向にあるというものである。このような観点から論じることで、統語的・意味的双方の側面から整合性のある説明が可能となった。

最後に、行為者の意図性の有無という概念が、結果構文に関する他の諸々の言語現象を説明するのに有効であることを、動詞と結果述語が隣接した RVA 構文、ECM 型結果構文における修辭性、および規範に反する動詞と結果述語の組み合わせが例外的に許容される現象を具体的に取り上げながら論じた。

³ (39)の解釈は、概ね、「おやおや、君は本来服を洗ってきれいにすべきなのに、実際にはそれとは反対に服を汚してしまっているじゃないか」というものになるろう。

参考文献

- 影山太郎(1996)『動詞意味論一言語と認知の接点一』くろしお出版, 東京.
- 影山太郎(2005)「辞書の知識と語用論的知識一語彙概念構造とクオリア構造の融合にむけて一」『レキシコンフォーラム No. 1』影山太郎編, 65-101, ひつじ書房, 東京.
- 影山太郎(2007)「英語結果述語の意味分類と統語構造」『結果構文研究の新視点』小野尚之編, 33-65, ひつじ書房, 東京.
- 木原美樹子(2002)「英語の結果構文に関わる意味的制約」中村学園大学・中村学園大学短期大学部研究紀要第 34 号, 25-31.
- 木原美樹子(2011)「結果構文の修辞と容認性」日本英文学会九州支部第 64 回大会シンポジウム『結果構文研究の現状と展望』ハンドアウト.
- Levin, Beth and Malka Rappaport Hovav (1995) *Unaccusativity: At the Syntax-Lexical Semantics Interface*, MIT Press, Cambridge, MA.
- 中村芳久(2004)「主観性の言語学: 主観性と文法構造・構文」『認知文法論 II』シリーズ認知言語学入門第 5 巻, 中村芳久編, 3-51, 大修館書店, 東京.
- 西村義樹(1998)「行為者と使役構文」『日英語比較選書 5: 構文と事象構造』中右実・西村義樹, 107-203. 研究社, 東京.
- Pustejovsky, James (1995) *The Generative Lexicon*, MIT Press, Cambridge, MA.
- Simpson, Jane(1983) "Resultatives," *Papers in Lexical-Functional Grammar*, ed. by Lori Levin, Malka Rappaport, and Anne Zaenen, 143-157, Indiana University Linguistics Club, Bloomington.
- 鈴木亨(2007)「結果構文における有界性制約を再考する」『結果構文研究の新視点』小野尚之編, 103-141, ひつじ書房, 東京.
- Taniwaki, Yasuko(2006) "Resultative Verb-Adjective Combinations as Lexical Compounds," 『レキシコンフォーラム No. 2』影山太郎編, 251-280, ひつじ書房, 東京.
- 都築雅子(2007)「ゲルマン諸語に見られる派生的結果構文に関する一考察」『結果構文研究の新視点』小野尚之編, 143-176, ひつじ書房, 東京.